

# 文楽

ひついで



文化財保護委員会



## 古文化財をまもろう

文化財保護委員会

委員長 高橋 誠一郎

文化の香り高き国は過去の優れた文化を尊重する国である。過去において創作された古い文化に対する愛着は、また将来における新しい文化を創造する。

文化はさまざまの形をとって現われる。あるいは源氏物語絵巻のような大和絵となりあるいは法隆寺のような堂塔伽藍の建造物となり、あるいは文楽のような人形浄瑠璃となる。文化がこのように具体的な形をとつたものを文化財という。こゝに述べた例を始めとして、わが国には世界に誇るべき国民の宝とするに足る文化財が甚だ多い。

しかるに、これらの文化財は星霜の経過、世相の変轉につれて損滅衰亡の悲運に会いがちである。この一、二年間にも法隆寺金堂や鹿苑寺金閣が焼失し、颱風で天橋立の一部が損傷し錦帯橋が流出している。さらに終戦後の経済変革は絵巻物をばらばらに切つて、一図々々売買する者を生ぜしめたり、またわが国の勝れた工芸技術や、伝統ある芸能も目に見えぬ衰亡をたどっているものもある。

文化国家日本がこれに無関心でいることができようか。昭和二十五年四月文化財保護について、劃期的立法である文化財保護法が成立し、八月には文化財保護委員会が文部省にその外局として設置されたのである。文化財保護委員会は保護法の精神に則し文化財の保存保護を図ると共に、これを国民に公開して、これらが国民の貴重な財産であることを自覚し、これが愛護に協力して頂くことを期している。

# 文楽になるまで

河竹繁俊

○ 文楽の故郷はどこか、その故郷で、どんなおいたちをしたのだろうか。その両親は？ その両親の身分や生立ちは？ といった問題について、かんたんに述べて、文楽ならびに文楽系の人形芝居の、やかましく言えば史的意義といったことについて、申し述べて見ましょう。

いまの文楽の来歴については、三宅さんが詳しく書いてあるわけですが、文楽になる前の人形淨瑠璃芝居、ないしは人形劇についてだけ考えて見ても、じつに古い歴史の流れが、千年以上にわたっているのです。

○ いったい、人形を動かして舞わせて、人を楽しませよろこばせる、ということとは、ごくの根本は宗教的な意味を多分に持っているのだが、それはあまりに事めんどうになるから省くとして、人形を芸能に用いるということは、ほとんどあらゆる民族に通じたものです。したがって人形芝居というものは、人間の演ずる芝居よりも簡単だから、世界的にひろく、また古くから行なわれている。

日本にも古くから人形を舞わせ動かすことによって、神様をまつたり、人を楽しませることはあったろうと考えられますが、歴史の上にあらわれたところでは、シナから朝鮮を経由して大陸から渡ってきております。

一千百余年前の奈良朝頃に、散楽さんがくという演芸が日本にはいつてきた。散楽は後には猿楽さるがくと呼ばれましたが、曲芸・手品・幻術・漫才のような滑稽問答・歌謡曲・一人芝居といったような、民衆的な芸能の

総称だったのですが、その中に傀儡くわいらい子こ（師）という人形をつかうものもまじってあった。くぐつまわしとも呼ばれております。この傀儡子なるものの故郷はというと、朝鮮でもシナでもなくて、もっと遠い中央アジア、パミール高原方面だということになっている。この地方は世界で最も早く開けた場所となっているだけに、さまざまの芸能も早く生れ、漂浪ひょうろう芸人がそれを伝えてシナに入り、朝鮮に入り、やがて海を渡って日本にも来ておちついたのであります。

日本へ来てからは、賤しい帰化民族として取り扱われ、大道芸人として漂遊していたらしく、おもに婦女子が人形を手にし、歌謡曲に合せて舞わせ、道行く人の足をとどめたという。言ってみれば、これが日本の人形芝居の玉子です。その後、長いあいだ人形遣にんぎょうぢいは門附かどづ芸人の一種として、日本全国にひろく行なわれていた。

○ 今から三百五十年ほど前、江戸時代のはじめ頃になると、この人形を遣う技術が非常に進歩したことが記録に見えている。木で作った人形ながら、生けるものの如くに遣って見る人を驚嘆させたとか京都の御所へ参入して、「高砂」だの「弓八幡」だのといふ謡曲をうたいながら人形をまわして、おなぐさめしたとも伝えられている。けれども、この時分のはいわゆる首掛芝居で、首から紐で、小さな箱をつりさげて、その箱から人形を取り出し、箱を舞台のように用いて芝居の真似をするのである。が、ともかくも人形をあやつる技術はだいに進歩してきた。

これに目をつけたのが淨瑠璃語りでありました。

○ 人形淨瑠璃芝居は、一と目見れば分かるように、人形と淨瑠璃と

三味線という、この三者から成りたつておるのですが、この三者は初めから一体のものではなくて、それぞれ別に生れ、発達したものが結合し、提携したものである。

そこで、日本の人形遣いの来歴は、前述べたとおりですが、淨瑠璃なるものは、室町期の中頃、すなわち東山時代、今日からは四百年以上も前に発生した一種の歌謡曲でした。琵琶歌というものは、鎌倉時代に一世を風靡した音楽であり歌謡曲だったのが、星移り時変り、三百余年を経た東山時代ころになると、民衆はその支持からはなれて、新しい歌謡曲を要望するようになった。この要望にこたえて新しく生れた歌謡曲が淨瑠璃という新派の琵琶歌だったのであります。ところが此の新歌謡曲には独得の伴奏楽器はなく、琵琶や扇柏子あふらこで語っていた。そこへ三味線というものがあらわれたのです。

永祿年間という、ざっと四百年前ですが、当時唯一の貿易港だった泉州堺に琉球から蛇皮線が輸入された。蛇の皮を張った三絃楽器だったと考えられているが、この楽器をわが国の音楽家が改造して、蛇皮は入手困難なので替りに猫の皮を張ったところが、すこぶるセンチメンタルで微妙な音色を出し、不思議な魅力を発揮した。ことに舶来品の珍奇を好む人心にも投じたので、淨瑠璃は直ちに自家の楽器とした。そこで、あたかも今日のギターとかアコーディオンによる歌謡曲のように、非常な勢いで流行しはじめた。

この波に乗って、三味線による淨瑠璃の名手は数多く輩出した中に、京都の目貫屋長三郎なるものが、人形と提携して、立体的に演奏し演出して見ようと、攝州西ノ宮の傀儡子と計って試演してみた。これが見たい、慶長の初年のこととなつてゐる。すると物凄い成功をおさめたので、それから人形と淨瑠璃と三味線とは、切っても切れない仲となり、ここに日本の人形淨瑠璃芝居は成立を告げたのであった。

ただし、この流行にひかれて、古くからあつた説経ぶしも三味線と提携し、また人形とも結合して、元祿ごろまでは人形説経芝居が相当な繁昌を見せましたが、このことは今は省いておきます。

さて、これで人形淨瑠璃芝居なるものは、一応成立を見たわけですが、音楽になるまではまだまだよいなことではなかった。

はじめは京都に栄え、次ぎに江戸が本場となり、やがて寛文・元祿ごろから大阪に本據が移って現在に及んでいるのですが、このあいだに、竹本義太夫という天才的音楽家があらわれて近松門左衛門と結託したり、竹本座と豊竹座が対抗して火花を散らしたり、吉田文三郎という人形遣いにして演出家であり作家でもあるという、えらい者もあらわれ、並木宗輔・竹田出雲・近松半二などという作家もあらわれて「忠臣蔵」や「菅原」や「一の谷」や「夏祭り」や「妹背山」だの「二十四考」だのという名作が、ぞくぞくと出来たのでありました。

一方、人形の遣い方には、本来糸あやつりと手遣い式があつたのですが、吉田文三郎の時代になると、糸による仕掛を人形の内部に應用して、眉や眼や口のあいだり閉じたりするメカニズムを發明しました。そうして一つの人形を三人で遣つて、複雑な動作も微妙な表情も、演出できるような考案がめぐらされたのです。

結局、こんにちの音楽のような三人遣い式は、享保末年に案出されたものですが、こういう様式の人形芝居は世界中に比類がない。日本文化の花だといつてもよいのです。のみならず、義太夫という音楽にしても、人形芝居演出の技術にしても、三百餘年の打ちつづく平和とその文化によらなければ、これほどの芸術品にはなりません。まことに代表的な無形文化財と申すべきで、その保存擁護は現代人に課せられた義務であり、国家としても国宝的な、要保護文化財として関心を拂わねばならないものと言うべきであります。

# 文樂の制度と価値

三宅周太郎

終戦の翌年冬であった。京都にいる私は、中学が同志社出身のため、その頃同志社へ見えた某外人の文化人を圍むお茶の会へ出席した。するとその外人はすべて海外の人形芝居に興味を持っていられて、日本へ来ても大阪の人形浄るりの、復興したばかりの文楽座を見て物せられた直後であった。そしてその印象を語られて、相当立派な芸術といわれ、それがさびれているのを悲しむと述べられたのであった。

あのあわただしい時代でも、この見識ある意見を持つ外人があったのは、文楽のために誠に喜ぶべき福音であらう、併し、この頃は本場の四つ橋の文楽がやや不振ではあるが、それは例の組合派（三つ和会）の脱退、一昨年秋の山城の相三味線の鶴沢清六が、山城と絶縁したことなどが原因していると思う。私はこれらの問題が、何らかの形において円満に解決するのを望む。そしてもしこれがいつ迄も現状の如く分離していれば、それこそ折角の文楽座も、世間の信用と同情とを失って、遂に絶滅の外はないと信じる。彼等にもし真に芸術家の魂があり、人形浄るりに真に愛着を持つなら、もうい加減に円満握手の策に出るべきだと思っている。

以上現在の文楽の不振から、私は結論をさきについてしまったが、かく文楽の復興を念じるのは、何としてもそれ自身によき伝統、内容、学問的要素を持つているからだ。又、貞享二年に作者近松門左衛門と、初代竹本義太夫との二大天才が、道頓堀で竹本座なる人形浄るりの小屋を始めて以来二百数十年、今の文楽座はその流れを汲んでいるからだ。一方、歌舞伎芝居は幸に未だ健在だが、この人形

浄るりだけの正しい伝統と教義とは、今日では伝はっていない形がある故にのみでも、文楽は古典演劇の祖とし、父として認めるべき価値があるのは、私など一再ならず力説してきた所である。

この経歴を持つ文楽座は、既記のやうに竹本座の命脈を伝えるものだが、文楽として出現したのは約百七八十年前の寛政の頃、淡路の興行師の植村文楽軒が大阪へ出て、初めて自分で人形浄るりの小屋を造り、それを「文楽軒の芝居」と呼んだのが始まりといわれている。後、文化八年には博労町の稲荷境内に文楽軒の芝居として記録に残っている。その後天保の改革などで変化はあったが、今日の文楽座としては、明治五年一月に松島で現在のような文楽座を初めて造った。だが、これも不景氣その他の理由ですたれて、明治十七年九月、平野町御霊神社内に、新に人形浄るりの小屋を造ったのが、今の文楽座の本当の始まりといへる。そしてこれが大正十五年十一月二十九日に焼失、ために昭和五年一月四つ橋に文楽座が建築せられた。が、これは戦災にかかった結果、二十一年二月更に現在のやうに同じ四つ橋に文楽座が再建せられたのである。ついでにいうと、この文楽座は三越劇場よりやや広い程度の小劇場で、音楽を聞くためには快適、舞台も人形浄るりのために、劇場とちがった板のはり方がしてあって、最も大切な人形の足拍子（あしびょうし）も快く効果的に響く。その特殊な構造は火災で焼けた御霊神社内時代の文楽と、さう大差がない程度に工夫せられている。

尚、この御霊文楽座時代迄は、太夫、三味線、人形の三業に厳格な修行が保たれていた。即ち、朝は八時半にあいて、夕八時近くま

で興行した結果、長い五段続きの時代物の丸本物も、殆どカットなしにその大序(だいじよ)から終末まで上演せられた。ために初歩で入座したばかりの太夫は、早朝見物の来るか来ないかのうちに、ミ、ス、の中で、それらの丸本物の大序を、数人で少しづつ、語るのを、その修行の第一歩とした。この大序の一日約五分程度の修行を、大体三年続けて少し地位が進み、この大序を卒業するには十年を要した。それから二段目の口を語り、この二段目の修行も約十年、そしてやっと一人前の太夫となるには三十年の教養を要したのであった。しかも、大序の十年は給金はあるかなしだ。十五才で大序に入ったとして、四十五才で一人前になったといふ条、それは経歴のみで、例へば現存の綱太夫だけの存在になる者は、この三十年修行の太夫の中で、五十人に一人しかない割合になっている。つまり、一人の綱太夫を生むために、三十年苦行の文楽の中老の太夫四十九人が下積みとなり、犠牲となっているわけになる。

人形もこれと同様で、初めて弟子入りをした少年の人形遣いは、足のみを遣うがこれも約十年の修行をした。それから人形の左手のみを助手として遣うのに十年、その後、胴を遣って、一人前の人形遣ひとなるのに、やはり三十年を要したのだ。これとて三十年を経てポスターバリユウのある人形遣い一人を生むのに、依然五十対一、或は百対一の割合で、四十九人又は九十九人の犠牲者を出すのは、太夫以上といへよう。三味線ひきもこれと大差はない。

従って、これ程労して報はれぬ芸能は珍しい。だから人形浄瑠璃に限っては、古来からそれぞれ殆ど一人一代きりて、その子孫を太夫や人形遣ひとしている例は稀だ。即ち、余りに困難で不遇のために、彼等は自分一代で終って、子孫に再びこの道を歩ませていないわけである。が、それでなぜ今日まで存続したかという点、単にこれが好きでならないから、やって来たという「芸の魂」(或は芸の

神)の力の結果だといっていると思う。

しかも、一寸いった如くこれ程原作至上主義の舞台芸術はない。今は大序の制度修行はなくなったが、それでも各自半段一段を語るのに、一字一句原作至上尊重の態度に変わりはない。自然、人形浄瑠璃は歌舞伎の丸本物上演の師、学校といえる。その芸術的な原作紹介の功のみでも、これを歌舞伎の博物館、大学として保護すべき義務があるのであるまいか。

#### 表紙の舞台写真は

「絵本太閤記」十次郎と操

撮影は渡辺義雄氏の御好意による。

昭和二十六年四月三十日 印刷  
昭和二十六年五月一日 発行

### 文化財保護委員会

東京都千代田区霞ヶ関

富山房の芸能書

藤井乙男著  
**近松世話物全集全三巻**  
 和 田 萬 吉 著  
**謡曲物語**  
 渥 美 清 太 郎 著  
**六代目菊五郎評傳**  
 文 博 佐 々 木 八 郎 著  
**芸能——展開の理念——**  
 三 宅 周 太 郎 著  
**羽左衛門評話**

上巻 B 6 二四六頁  
 中巻 三〇〇円  
 下巻 一八〇円  
 各 三三〇円  
 振替東京 54529

A 6 一〇三六頁  
 定価 四五〇円  
 三五〇円

B 6 四八〇頁  
 定価 四八〇円  
 三五〇円

A 5 二七六頁  
 定価 二五〇円  
 三五〇円

B 6 三五四頁  
 定価 一五〇円  
 三五〇円

東京 神田 富山房  
 神保町1の3

文 理  
庫 科

全 50 冊 発 行 中

内 容 見 本 送 呈

文 社  
庫 科

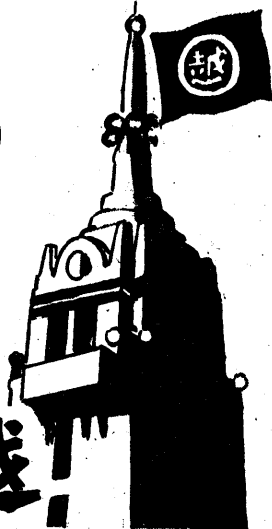
全 94 冊 完 結

中学生・高校生諸君の  
 学習と教養の参考書

社会科学文庫は全九四冊を七項目に分類し各単元に必要な知識を悉く収録  
 本文庫の中には河竹先生の「演劇」瓜生先生の「映画」等も  
 あります。  
 理科文庫は新しい文庫型のなかに中学・高校に必要な理科の知識を圧縮、気軽に学習の参考となり科学探求の要望に応じ

東京 三省堂 神田

お買物上手は  
 家庭の幸福



宿 幌 都 戸 山  
 新 札 京 神 松  
 橋 座 台 阪 松  
 本 銀 仙 大 高

三 越

小・中学生の友  
 みつばち 文庫

各 200 円 送料 20 円

近刊 既刊  
 富田博之著 小さな学芸会  
 北見順子著 かざりの工夫  
 貝谷八百子著 たのしいバレエ  
 古川晴男著 こん虫採集

日本図書館協会推せん書

舞台美術全般を豊富な挿画五〇枚で小・中学生に分るように、やさしく説明した便利で、すぐれた手引書（学校劇必備の書）

吉田謙吉著 日本図書館協会選定図書  
 たのしい 舞台装置

東京都文京区 国土社 振替・東京  
 高田豊川町 90631 番

